

## 平成19年度 教師海外研修(ネパールコース)研修報告書

学校名 愛媛県立宇和聾学校

担当教科 国語  
氏名 渡部 陽子

### 1. 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

研修を通して、ネパールの社会や文化に触れ、教育・水道技術・果樹栽培の分野における海外協力の活動現場を視察することで、ネパールと日本の協力関係を理解し、その課題についての認識を深めていきたいと考えている。また、それぞれの国の文化を比較することを中心にして、国際理解教育（開発教育）の素材を探していきたいと考えている。特に、主眼を置いた点としては、以下の4点である。

(1) ネパールの子どもたちが学習している場面をよく観察する。

教室環境からも学習の状況はある程度は把握できるところもあるので、注意深く観察することにした。そして、協力隊員が学校現場でどのような関わりをもっているか（子どもたちに対して、現地の教員に対して、地域社会に対して）、どんな思いで教育に携わっておられるのかを伺うことにした。しかし、残念なことに時間的な制約もあり、十分に話を聞けなかった。また、今回は特に特別支援教育の現状に付いても視察してきたかったが、特別支援学校を訪問することはできなかった。ホームステイ先のホストにお願いをしてみたが、特別支援学校が近くにないので連れて行くことはできないということであった。（現在、協力隊員として派遣されてNGO関係の特別支援学校に勤務されている上原さんやノンフォーマル教育の教育に携わっておられる小田さんから、特別支援教育の現状についてのお話を少しではあるが伺うことができた。）

(2) ホームステイ先では、「家」の中からみえてくる異文化という点に注目する。

家族の様子や食事の様子、家庭における女性の地位や役割から、教材化できる素材を見つける努力をしたいと思います。

(3) ネパールの上水道の現状を知るため、浄水場を見学したり、伝統的な公共水場の状況を観察する。そして、「水」の大切さや環境を守ることの大切さについて考えさせることができる素材を探すように努めた。

(4) 日本のJICAが提供する適正技術は、具体的にどのようなものなのかを理解する。そのため、ネパールにおける農業分野（果樹栽培のプロジェクト）の農地見学を通して理解する。

### 2. 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

今回の視察を通して、カルチャーショックを受けたことの一つに、「ことば」の問題があったと思う。コミュニケーション手段としての「ことば」と、学校の授業で使われる「ことば」について、考えるきっかけを与えられたように思う。さらには、それらを包括する形で国際語としての「英語」があることも身をもって感得することができたように思う。

学校教育の場面で感じたこととして、ネパールの場合、母語としておおよそ98の言語が存在するが、教育は公用語のネパール語で進められているということ、さらに、「英語」も公用語的に使用頻度の高い「ことば」として定着している社会（カトマンドウ近郊だけの現象かもしれない

いが・・・)が存在していることを知ることができた。

ネパールの子どもたちにとっては、コミュニケーション手段としての使用頻度の高い「ことば」が、「ネパール語と英語」であり、それらを学校教育の中でも習得しているということである。(もともとの母語はあまり使わないので忘れていくということ話を話して下さった方もいらっしゃる。)日本では、国民の大多数が母語として日本語を話し、外国語としての「英語」を教科学習で学んでいるが、ネパールの子どもにとっては、実生活のことばとして「ネパール語と英語」が共存しているという感じがした。

日本の「国語」は「日本語」であるという認識とともに、国語の教員として、私が教えている教科としての「国語」とは何なのか、聴覚障害児にとっての「日本語」とは何なのか、さらには「ことばと教育」について、考える契機を得ることになった。

次に、通訳を介して視察場所における説明内容を理解する場面で感じたことは、私自身は「ネパール語の壁」、ひいては、「英語の壁」を痛切に感じたということである。もちろん通訳の方がいてくださったおかげでなんとか視察場所での説明は理解できたが、ダイレクトに伝わらない不便さ、微妙なニュアンスの違いからくるちぐはぐな感覚が残っている。このような感覚は、聴覚障害者に対して情報保障として手話通訳をするときの感覚と似ている。情報の発信者と受信者の間に「通訳」が介在することの難しさを感じた。異文化理解は、まさに言葉の壁をどう乗り越えるかということだといっても過言ではないと思った。「ことば」が通じなくても「思い」は伝わるとするのは、現実的には極めて困難なことであるということはこの海外研修を通して、理解することができた。

ましてや、海外で協力隊として支援活動を進めていく上では、「現地のことば」を話し、そして理解するということはとても大変なことなのだろうと思った。今回の研修で、お世話になったJICA事務所の方々、隊員の方たちは、「現地のことば」が堪能で現地の方々とはスムーズにコミュニケーションを図っていらっしゃる姿を見せていただくことができ、自分の語学力不足を痛感させられた。

また、「英語」は今まさに、地球の「ことば」になっているということも実感することができた。頭では理解していたことではあるが、衝撃として感じることもできた体験であったと思う。この貴重な体験を踏まえて、生徒たちにも「英語力」や「コミュニケーション力」の大切さを改めて提示していきたいと考えている。

### 3. 教育指導への活用について

総合的な学習の時間及び、学級活動、自立活動の時間を使って授業実践を行っていききたい。本年度は中学部所属であるが、小学部でも授業をさせていただく予定である。また、参観日や学習発表会の場面を利用して、ネパールをフィルターとした国際理解教育を実践していききたいと考えている。

指導の目標としては、以下に示す2点を考えてみた。

- (1) ネパールにおけるJICA事業の概要やネパールで活動している青年海外協力隊員の紹介をすることで、「国際協力」ということばについて具体的なイメージを持たせる。
- (2) 「ネパール」で撮った写真、ビデオ見せたり、ネパールの子どもたちが使っている教材を紹介する。また、民族衣装を身につけさせる。ネパール語で自分の名前を書かせたり、簡単な自己紹介をさせる。そして、ネパール料理をつくり、試食させること等を通して、他国ひいては、自国の文化やことばに興味をもたせる。

発展的な内容として、地域理解教育の一環として、地元宇和町内の浄水場やゴミの焼却場の視察、みかん農家の方へのインタビュー、地元の農業高校の生徒や先生との交流を実際に体験させてみる。その結果から、ネパールの現状と自分たちの町の現状を比較させ、相違点や共通点を見つけ出していきたい。そうすることで、国や文化が違っても、同じ地球時間を過ごしているという感覚が少しずつ生まれてくるのではないかと思われる。

「今、自分が目にしたもの、それがすべて」であって、それ以外の情報が存在することに気がつきにくい生徒たちであるので、ネパールと自分がつながっているという実感を伴った体験をいか

に取り入れていくかが課題になると思う。目で見て、触れて、話して、そして、食して、自分のことばで言語化させてみるという体験活動をできるだけ取り入れてみたい。背景にある事象や因果関係が捉えられにくい生徒たちもいるので、上位概念として結びつきにくいところもあると思われるが、日本とネパールの結びつきを見ていくことで、生徒たちと一緒に国際理解や国際協力の意義について考えていくことができるような授業実践を心がけたいと思っている。

#### 4. 研修に関する全般的な所感／意見について

11日間の研修を終えて感じていることは、いろいろあり過ぎてうまくまとまらないというのが正直なところである。各訪問先で得た情報も膨大であった。また、バスの移動中の車窓から見る景色もカトマンドウの街の喧騒も、そして、街のにおいも・・・、そのすべてが、強烈な印象として心の中に残っている。すべてが異文化体験であったと思う。前にも述べたが、ことばの壁も高く厚かった。ネパールでの体験は、自分の既成概念にあてはまらないものをこれからどう受け入れるか、受けとめるかというテーマ抜きには考えられないものであった。まだまだ、近くことのできない国だけれども、今更ながら、ネパール語を勉強してみようという考えがわいてきたことは自分の中での変化なのかもしれないと思っている。

さらに、今回の研修ではJICAの存在の大きさを再認識した。ネパールの人々は、JICAの支援活動を通して、日本人や日本国に接しているのだという思いを強く感じることができた。現地の方が「JICAさん」と親しみを込めて呼んでいたことから、貢献度が高いのだということが推測できた。JICAの海外研修に参加させていただいたからこそ、体験できたことが数多くあるということ、日程表に書かれてある体験プログラムの背景にある諸々の出来事、人との出会いを支えてくださっていたことに感謝したいと思う。

最後に、JICA四国の皆様に、そして、教師海外研修ネパールコースに同行していただいたJICA四国の市民参加協力調整員の山本高弘さんに心よりお礼を申し述べたいと思っている。

#### 5. JICA四国に対する要望・提言

- (1) 愛媛の教育現場・教職員の意識の中では、まだまだ「JICA」が浸透していないこともあり、教師海外研修のPR活動も含めて、四国各県の教育委員会にこれまで以上に働きかけていただきたい。
- (2) 募集要項の段階で訪問先がある程度提示されていると、参加する側の意識もこれまで以上に高まるのではないだろうか。細かい部分での変更はやむを得ないが、大枠で示してであると参加しやすくなると思う。

#### 6. 今後の本研修参加者へのアドバイス

- (1) 過去の先生方のアドバイスを是非とも参考にされるとよいと思う。
- (2) 昨年度の「タイ」研修に参加された先生から、「ウェットティッシュ」持っていった方がいいと聞いていたので、持っていった。ネパールでも大変役に立った。開発途上国の衛生状態は日本とはかなり違っているので、食事以外の場面でも使うことは多かった。気にしすぎの面もあるかもしれないが、気持ち的に安心できた。(自分の身を守るのは自分しかないと思ってください。)
- (3) トイレ事情は「よいはずはない」と思って参加されるとよいと思う。最初からその覚悟は大切だと思う。
- (4) ホームステイ先にもいろいろな家庭の事情があるので、様子をみながら、判断に迷うときはホストに了解を取りながら行動するとよいと思った。まだまだ保守的な方もいらっしゃるのでは、全面的に受け入れるというムードにならないこともあると思う。
- (5) 街のバザールでの買い物時間はほとんどないと考えていた方がよいと思う。今回は教材化したいものを買う時間がほとんどなかったので、ホームステイなど、比較的自由時間が使える時(実際には無理だと思うが)に物色しておくともよいかもしれない。

#### 7. 各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？ その他所感
<u>J u l 3 0</u>  <u>1 5 : 0 0</u> <u>1 5 : 3 0</u> <u>1 6 : 0 0</u> <u>1 9 : 0 0</u>	<u>B K K - K T M</u>  <u>J I C A 事務所訪問</u> <u>安全対策について</u> <u>ネパール語研修について</u> <u>夕食 所長宅</u>	<p>ネパールは比較的治安のよい国であるが、観光客目当てのスリには気を付けるようにということであった。また、水には要注意ということをお願いされた。歯磨きをするのにも、うがいをするのにもミネラルウォーターを使うようにということであった。また、簡単なあいさつ程度のネパール語を覚えていただいた。</p> <p>→日本では当たり前のように水道水を使っているが、水道施設・設備が整うまでの過程やインフラ設備の大切さについて知らせたい。日本の生活においてはあたりまえに整っているライフラインが便利で「ありがたい」ものであるということにも気付かせたい。ネパールの簡単なあいさつ言葉を生徒達に紹介することで、日本語のあいさつの言葉と比較させてみたい。</p>
<u>J u l 3 1</u> <u>9 : 0 0</u> <u>1 0 : 0 0</u> <u>1 1 : 0 0</u> <u>1 2 : 0 0</u> <u>1 3 : 0 0</u> <u>1 4 : 3 0</u> <u>1 6 : 0 0</u> <u>1 8 : 0 0</u>	<u>J I C A ネパール事務所につ</u> <u>いて</u> <u>ネパール教育部門について</u> <u>J I C A 事務所出発</u> <u>昼食 教員研修所にて</u> <u>教科書センター</u> <u>カリキュラム開発センタ</u> <u>ー</u> <u>教員教育センター</u> <u>ホテル着</u>	<p>ネパールの国のありよう、また、日本の開発協力のありようについて、JICAネパール事務所 所長 吉浦氏が分かりやすく話してくださった。これからは「自分が住んでいるところのことだけ知っているでは生きられない時代」がやってくるという言葉が印象に残っている。</p> <p>教科書センター、カリキュラム開発センター、教員教育センターでは、ネパールの教育事情の概要を知ることができた。多様な民族とその言語を背景にして、ネパール語で授業が行われていることや、「英語」教育もカリキュラムの中心に置かれていることが分かった。また、理数系教科にも力を入れているということであった。また、教員の質の向上、授業改善も大切な課題であるという。</p> <p>ネパールの公立学校では、全国一律の教科書を使用しており、それらの印刷・製本が、ほぼ一カ所の印刷所（見学先の印刷工場）でつくられていることを知った。印刷所の機械設備やメンテナンスにおいても、JICAなどのドナーの協力支援がなされていることを知った。</p> <p>→ネパールという「国」が、これからの公立学校での教育に力を入れていこうとしていることを伝えたい。また、公立学校にも通うことができない子どもがいるという現状が、どのような理由によるものなのかも理解させていきたいと思う。さらに、「貧困の悪循環を断ち切る」ためにはなぜ教育が必要なのかを考えさせたい。</p>
<u>A u g 1</u> <u>9 : 0 0</u> <u>1 0 : 0 0</u>  <u>1 1 : 3 0</u> <u>1 3 : 0 0</u> <u>1 5 : 0 0</u>	<u>ホテル出発</u> <u>現地到着</u> <u>ナバジョティ初等学校</u> <u>プルチョーキ初等学校</u> <u>パタレチャップ初等学校</u> <u>シッデシヨール初等中学校</u>	<p>QSP (Quality School Project) の概要をプリントで知ることができた。実際に協力隊員が活動しておられる公立学校4校を視察したことで、校舎や教室などの様子が日本の学校とは全く違うことに驚いた。視察した公立学校では、英語と算数の指導に力を入れているようであった。3番目に来校した学校では、児童と同じ給食を試食した。質素</p>

<p>17:00</p>	<p>ホテル</p>	<p>なもの（パットライスのようなスナックがカップ一杯とペットボトルの水）であったが、学校で給食を出すようになって、昼からの授業に参加する児童数が増えたと聞いた。自分の弁当箱の中を見せてくれた子どももいたが、弁当箱にはビスケットが3枚入っているだけであった。</p> <p>また、これらの「公立学校が抱える大きな問題の一つに、私立学校への生徒の流出がある」という、親たちは自分の子どもたちにより高い、質のよい教育を受けさせたいと思い高い授業料を払ってでも私立学校に行かせるのだという。しかし、今回訪問した公立学校の生徒たちは、親に手をかけてもらえなかったり、複雑な家庭環境で育っていたりする生徒たちが通っている学校であるということも知った。</p> <p>→学校で勉強することが楽しいというネパールの子どものたちの目の輝きを授業で伝えたい。また、シッデシヨール初等中等学校の生徒（Class 7）が言った「一番したいことは勉強、一番ほしいものは教育です」という言葉を授業で取り上げて、この言葉をどう受け止めるか、生徒の意見を聞いてみたいと思う。</p>
<p>Aug 2 9:00 10:00 10:45 13:00 14:30 17:00</p>	<p>上水道プロジェクトについて JICA事務所出発 浄水場見学 昼食 伝統的公共水場見学 ホテル着</p>	<p>水道政策アドバイザー尾寄昇氏よりカトマンズの上水道について概要を説明していただいた。上水道の現状が思っていた以上に厳しいということが分かった。「メラムチ計画」についても、計画後10年以上を経て、アクセスロードのみ完成、民間企業との契約は見通し立たず、計画を上回る人口増加、という状況で実施のめどは立っていないということであった。浄水場を見学して、日本の協力がハード面だけではなく、ソフト面にも活かされようとしていることが分かった。浄水施設を日本の技術でつくったで終わるのではなく、施設の維持管理、経営改善まで見通した支援が大切であることを学んだ。</p> <p>→カトマンズの水事情と自分の住んでいる町の水事情を比較させ、水の大切さについて考えさせたい。「水」をテーマにすることで、「環境」ということばの概念についてイメージを持たせたい。また、開発協力の場面において、人から人へ技術が伝達されていくことの大切さを伝えたい。</p>
<p>Aug 3 9:00 10:00 13:00 15:00 16:00</p>	<p>非正規教育プロジェクトについて 非正規教育クラス見学 昼食 ホームステイについて ホームステイ先に出発</p>	<p>ノンフォーマル教育CASP（キャスプ）の取り組みについての説明を聞くことで、学校に行っていない・行けていない子どもに教育の機会を与えるためには子どもたちを取り巻く地域への啓発活動がとても大切になるということが分かった。</p> <p>→ノンフォーマル教育が、なぜ必要なのかを生徒たちと一緒に考えてみたい。また、生徒自身が特別支援学校に通っていることの意義について、自分なりにまとめさせたい。</p>
<p>Aug 4 午前 午後</p>	<p>パタン ダルバール広場散策 休息</p>	<p>ホームステイ先では、日本語で会話をすることに限界を感じたが、それでも片言の日本語と英語の単語で対応してくださった。家族は三世代7人が暮らしていて、保守的な慣習の中で生活している感じがした。ラ</p>

	<p><u>ホストファミリーとの交流</u></p>	<p>リトプル（パタン）にあるダルバール広場へは、Umaさんの夫が連れて行ってくださった。とても気さくな方で、親切に解説を交えながら散策することができた。また、私立学校に通うUmaさんの姪と甥の宿題を見ていると、Class 4の英語の教科書の内容が日本の中2～3のレベルであること、情報（コンピュータ）の授業も受けていること、算数もかなり難しい内容（最大公約数を求める問題）をやっていることが分かった。</p> <p>→Umaさんの家族について紹介する中で、家族の役割や生活の仕方について、生徒自身の家族との比較を通して、「異文化」について考えさせたい。生活の仕方や考え方に「宗教の教え」が強く影響していることを伝え、現代日本のライフスタイルの違いに気付かせたい。また、英語を学習することの大切さについて生徒たちとともに考えたい。思いだけでは伝わらないもどかしさや、伝える手段としての「英語（国際語）」の大切さについても考えさせたい。</p>
<p><u>Aug 5</u>  <u>9:00</u>  <u>10:30</u>  <u>13:30</u>  <u>14:30</u>  <u>16:45</u>  <u>17:00</u></p>	<p><u>Mrs. Umaの職場へ</u>  <u>出発</u>  <u>職場見学</u>  <u>昼食</u>  <u>ミーティング（女性サークル？）</u>  <u>参加</u>  <u>ホテルに向けて出発</u>  <u>ホテル着</u></p>	<p>BTTC (Balaju Technical Training Center)の通勤バスに乗って、1時間30分。職業訓練校のインストラクターをしているUmaさんが仕事をしている様子を見学した。BTTCにJICAシニアボランティアで入っておられる戸山さんともお話しすることができた。ネパールにきて2年目になるという戸山さんはエンジニアとして技術指導をしていらっしゃるだけでなく、学生たちに日本語も教えていらっしゃるということであった。国語の教員だというと、将来的には「日本語教師」の資格を取得してみたらどうかというアドバイスをいただいた。外国人に「日本語」を教えるということは難しいことだけれど、日本の文化そのものを教えることになるやりがいのある仕事だと思ってしまうとおられた。</p> <p>→（所感）「国際理解教育」・「開発教育」の教材になるものを見つけようとすればするほど、「ネパール」が分からないという焦りや不安を感じていたときに、偶然にも戸山さんと出会った。そして、「自分で見たもの聞いたもの、感じたものは少なくとも本物です。それを生徒に伝えれば充分なのではないですか」という言葉をかけていただいたことで救われたような気持ちになった。戸山さんとの出会いも大切な体験であったと思う。ホームステイで日本語がほとんど通じなくて不安になっていたとき、思いがけなくシニアボランティアの方にお会いできて、「ネパール」についての私の個人的な疑問や思いを聞いていただくことができたことを何より嬉しく感じることができた。</p>
<p><u>Aug 6</u>  <u>9:00</u>  <u>10:00</u>  <u>14:30</u></p>	<p><u>園芸プロジェクトについて</u>  <u>農地見学</u>  <u>市内見学</u></p>	<p>ボランティア・プロジェクト「園芸普及計画」（2002年7月15日～2007年7月14日まで実施）の概要を説明していただいた後、2軒の農家を見学した。ナシ・カキなどの価値の高い果樹の栽培技術の普及状況はプロジェクトの目標に達しているのかもしれないが、農家の技術の取り入れ方や管理の仕方が均一でな</p>

		<p>く、そのことによって、各農家の成果（収穫量及び収益）は違っていることが分かった。</p> <p>→（所感）価値の高い園芸生産技術を普及させるためには、受け入れる側（農家自身）の意識改革がまず必要であると感じた。新しい技術を普及させていくときに、それが現地の農家だけで使いこなすことができる技術なのかどうか、また、技術定着の素地がどの程度整っているかどうかを検討することの重要性を強く感じた。</p> <p>専門的な技術や知識を持って活動していらっしゃる隊員の方々の熱意がよく伝わってきた。それと同時に、ネパールの人口の約8割が農業に従事している現状の中で、農業の知識や技術を身に付けるための専門機関（大学等）の割合が極めて少ないということ、農家の後継者不足、農村の過疎化、農業の機械化の遅れ等、課題は山積みであるという。</p> <p>ネパールの食糧自給率を見ると、ほぼ100%に近い数字である。日本の食糧自給率と比べるとかなり事情は違っている。しかし、店頭にはインスタント食品やペプシ・コーラ、コカ・コーラ等の飲料水、スナック菓子がたくさん並んでいた。カトマンドウを中心に食のグローバル化が少しずつではあるが、確実に進んでいるのかもしれないと思った。</p>
<u>A u g 7</u> <u>9 : 3 0</u> <u>1 1 : 0 0</u>	<u>ネパール事務所での報告会</u> <u>事務所出発</u> <u>K T N - B K K</u>	特記事項なし
<u>A u g 8</u>	<u>B K K - K a n s a i</u>	特記事項なし